

## 横山源之助を看取った女、尾崎恒子

The Lady who Accompanied YOKOYAMA GENNOSUKE  
until the End of his Life — OZAKI TSUNEKO

黒崎真美  
Mami KUROSAKI

### はじめに

米騒動発祥の地とされる旧十二銀行のすぐ隣、富山県魚津市の大町海岸公園に横山源之助の顕彰碑がひっそりと佇んでいる。横山源之助は「社会福祉の先駆者」と顕彰碑に刻される。その著書『日本之下層社会』（1899.4 教文館）は、明治の格差社会の底辺を統計学的に記録した、当時を知る貴重な資料として知らぬ者はいない。しかし、著した源之助の実像は、明らかにされていない事柄が余りにも多い。

本稿では、源之助の身近にいた女性として内妻松島やいや、恋人といわれる尾崎恒子について、恒子や周辺の人物の証言と記述から整理しておきたいと考える。

### 1 横山源之助とその家族

越中魚津町に生まれた源之助は、生後すぐに横山伝兵衛夫婦に託され、横山の実子として戸籍には記録された。

実父母は、立花雄一「黎明期労働運動と近代文学 — 横山源之助と岸上克巳」<sup>1</sup>の中の「別記 — 半如夢」<sup>2</sup>をヒントに調査すると、魚津の網元四十万半右衛門と奉公人の女性ではないかと推測される。

以前、拙著「横山源之助「越中魚津にて」貧民を書く」<sup>3</sup>にも示したが、江戸から明治にかけての魚津の魚問屋には「四十物屋半右衛門」がいた。「四十物屋」は明治の平民苗字必称義務令（1875.2.13布告）によって、「四十万」を名のった。『魚津町史』<sup>4</sup>や『魚津市史 資料編』<sup>5</sup>の当時のさまざまな記録を調べていくと、四十物屋の娘婿「半右衛門」が源之助の父親である可能性が高い。婿入りした半右衛門が四十物屋直系の娘ではない下女に産ませた子<sup>6</sup>を、横山伝兵衛夫婦に託したと考えることができるだろう。「伝兵衛夫妻は一男三女の実子よりも、長子としてひきとった源之助に将来の期待をかけた」<sup>7</sup>といい、横山家で愛情を注がれて成長した源之助は、1877年に、1873年に開校した魚津明理小学校に入学したと考えられる。小学校卒業後、数年間は油醬油問屋澤田六郎兵衛の下で奉公し、富山県中学校の第一期生として進学する。しかし翌年2月、一年余りで退学、法学家を目

指して上京して、前年に開校したばかりの英吉利法学校に入学したようだ。同郷の黒田源太郎<sup>8</sup>の「魚津町の人が知らざる横山源之助君」には、

君は明治二十四年三月、同校を卒業するまで、熱心勉強し、父も亦学資に事欠かせなかつたが、君も父も卒業せば直ぐに弁護士に為り得るものと考え居たらしい、本人は兎も角、父はさう考へて此処まで若干の遣繰もして、学資を貢いで来た。処が弁護士試験となるや、此年も翌年も翌々年も不合格続き、君は試験間際まで家に居たやうであつたが、上京して試験の下調へに浮身を糞し、権利義務に黄いろな嘴を尖らしてゐた

(黒田源太郎『炉辺夜話』1933.10 p 399)

とあり、弁護士を目指して挫折する源之助の姿を伝えている。

二葉亭四迷等を知るのは源之助が21歳の頃である。二葉亭から「文学と社会問題意識の影響をつよくうけ」<sup>9</sup>た源之助は、執筆によって貧困や労働、女性の労働、移民など、自らの問題意識を発信していく。

## 2 内妻松島やい

吉田久一・一番ヶ瀬康子「民間社会事業の中で：松島正儀氏に聞く」<sup>10</sup>には、横山源之助と内妻松島やいについて、次のような松島正儀の証言が記されている。

松島 私の母の結婚について、当時、富山県のこの地方では恋愛を受け入れなかつたので、両方の実家、親族が結婚を認めなかつたわけです。両方とも籍を入れることに判を押さなかつたのです。旅館をやっていたのですが、許してくれなかつた。

吉田 魚津ですか。

松島 そうです。やがてそれが貧困に結びついて、しかたがないので母は私をかかえて東京の友人のところに住むことになったわけです。当時、魚津は狭いところだから歩いていてもわかってしまう。そこで、やむを得ずその地を離れるより方法がなかつたんですね。いまは故人ですが、黒田源太郎という、東大を出た裁判官で、司法界では相当名をあげた人ですが、その方の生家が魚津にあって、私の家から少し離れていて、その黒田源太郎が東京の本郷に住んでいたんです。くにで知り合い、母は私をかかえて東京の黒田源太郎の家をたよって東京へ来たわけです。そしてしばらくするうちに東京で横山と知り合ったのです。それが本郷西片町一〇番地(中略) 横山さんが私の母に対して、これはあとから聞いたのですが、結局因襲によって人間の型がつけられるということについてひどく憤慨されたそうです。それで横山さんは魚津においでになり、両人が引きさかれたままで東京に来ているけれども、私が責任を持つから一緒になりたい、と言ったら、おまえさんが新たに入れかわっても認められない、こういうことでつい認められなかつたのです。それでやむを得ず挙式することもなく、東京で生活をともにしたわけです。

横山さんと一緒になったのですが、文筆生活で金がないというのが普通で、被服も金が入ったときにしか買えなかった。ふだんは米びつにお米もないという困窮状態であつたらしいですね。

一番ヶ瀬 横山さんとお母さんがご一緒にお住みになったとき、先生はお幾つでしたか。

松島 私はそのときはたしか五つですね。それから横山はその当時すでに文壇の人と関係があり、その中に小林一郎、滝村斐男という、あまり名も出ませんでした、それらの文士に触れて、梢という私の妹が生まれる前に、私を小林一郎が引き受けて切り離れた（中略）

吉田 横山の学歴がいまよくわからないのですが、中央大学に入ったという話もあるのですが、そんなことはお聞きになっていませんか。

松島 それは聞いてました。くには富山中学を出たようですね。彼はあまりきちんとした人ではなかったようで、家でも受け入れないし、当時としては、いわゆる文学青年らしくもない文学青年だったようですね。結局、黒田先生が東京にいらっしゃるといことが本人に刺激になって東京に出てきたのでしょうが、魚津から東京に出ている人がだいぶいるんです。それで東京に来て勉強するということが、金がなくて東京での生活はみじめだったようですね。

（『昭和社会事業史への証言』 p 11-13）

松島正儀は、源之助の内妻だった松島やいと板井文治との間に生まれた子である。

これを見ると、やいが恋愛を認めない地方の「因襲」によって、板井文治との恋愛結婚を阻まれたことが示される。「ふだんは米びつにお米もない」ほどの、源之助との貧困生活もうかがえる。

また、松島の母の恩人の黒田源太郎へ対する尊敬と、自分を捨て母に苦勞をさせた源之助へ対する嫌悪の感情が見え隠れする。黒田源太郎は、源之助の3歳年下であり、実際は源之助の後に上京している。源之助が訪れたという明治40年頃に黒田が居住していた「本郷西片町一〇番地」は、尾崎恒子の住まいがある森川町とは隣接していた。黒田は源之助の紹介で随筆を雑誌に掲載もしている、二人の関係性は、むしろ松島の認識とは逆であろう。黒田の家で女中をしていたやいと源之助は知り合い、源之助の家に同居することになって梢・博太郎の二人の子どもを儲ける。源之助はやいと結婚を申し出たが、魚津のやいの実家に許されず、内縁関係のままであった。たとえこれらの事情を知っていたとしても、松島にとって源之助は、母と籍も入れず困窮の生活を強い、文学青年崩れの「きちんとした人」とは感じられない人物で、母を不幸にした嫌悪すべき対象だったのであろう。

また、遠藤興一「回想の松島正儀（一）：ある評伝の試み」<sup>11</sup>にも、次のように松島正儀と源之助や梢との関わりが記されている。

松島正儀が生まれたのは明治三七（一九〇四）年八月一五日、出生届を出したところは東京市京橋区、この年は東京孤児院が赤坂区青山南町六丁目一〇五番地に新築、

移転した年にあたっており、松島が生まれて二カ月後の一〇月である。(中略) 梢が生まれた時、ちょうど五歳になろうとしていた正儀は、横山、やいの意向と周囲の勧めで外に出されることが決まり、小林の一時預りを経て、東京育成園に引き取られた。それまで正儀、梢を含む一家四人が暮したのは小石川指ヶ谷町三〇番地で、伝通院と市電通りにはさまれた坂道の中途にある間借り屋である。(中略)

一方、やいは晩年の横山がブラジル渡航や地方取材でしばしば家を空けたため、本郷区千駄木林町に住むジャーナリスト、松原岩五郎を頼るが、横山の没後は湯島天神町の学生寮、育英舎に住み込みで雇われ、数年後ひっそりと逝くなった。正儀は多分、母の死に目には立ち会っていない。やいという女性は「美人で、ひとのいい女であった」という。後年その遺骨は豊島護国寺から、神奈川県鶴沼の本心寺に改葬され、現在に至っている。

(中略) 松島は唯一の肉親であり、当時二六歳の異父妹とは、戦前の昭和八年という時点で互いに連絡を取り合うつながりを持っていたことは確かだと言わなければならない。

同じく東京育成園が所蔵する書簡草稿ノートを括っていくと、前年尾昭和七(一九三二)年七月一六日付「尾崎恒子、梢さんに」宛、「美枝子」発書簡の下書きが出てくる。(中略) 若き松島夫妻と尾崎恒子、梢は互いに相手の消息を知り、文通をとおして情報を共有していた。

ここでも、松島が見た源之助の人物像が示される。源之助の没後、やいは子どもたちと別れて湯島の学生寮で住み込みで働き、数年後に亡くなったという。最初、護国寺に葬られたのは源之助の墓所があるためであろうか。改葬された鶴沼の本真寺は、尾崎恒子所縁の寺で、後に恒子と娘の梢も埋葬されている。

### 3 源之助の臨終

源之助の臨終には、明治40年頃知り合った恋人といわれる尾崎恒子と、偶然居合わせた友人中村武羅夫が、立ち会うことになった。その時の様子を中村は次のように記述している。

妻子もあり、家庭も持つてゐたのだが、自分はその時人の家の二階借りをしてゐて、そこで息を引き取つた。よそ眼からみたところでも、主観的にも、決して幸福とは言へなかつた。臨終の傍にあたのは、友人といふやうな者としては、私一人であつた。

(中略) 文士の末路だつて、何も源之助のやうに暗澹たるものと決つてゐるわけではないことは、よく分つてゐる。それにもかかはらず、私は文士といふものの運命と末路とは、源之助のそれに依つて、いかにもよく表彰されてゐるやうな気がして、何か感傷的になり、暗い気がせずにはゐない。

(中略)

間借りの二階の六畳で、結核に肺炎を併発して、真黒な顔色になつて死ぬ時に、ゼエゼエと息を喘がせながら、聞き取りにくい嘎れた声で言つた最後の言葉は、

「中村君……これが、人生といふものかねエ……」

と、いふことだつた。

(「三島霜川と横山源之助 (下)」<sup>12</sup>)

これを見ると、源之助の臨終に妻子は立ち会わず、別に住んでいたことが示される。「戸籍には、大正四年六月三日午前五時三〇分東京小石川区白山前町一番地に於て死亡」と記載(『横山源之助伝』 p 390)されており、間借りの二階の六畳が何所か判然としないが、最期の戸籍の住所は白山前町であった。「病軀を湘南鵠沼の客舎に養ひ」(黒田源太郎『炉辺夜話』 p 404)とあるので、尾崎恒子所縁の鵠沼で間借りしていたとも推測できる。湘南には茅ヶ崎にサナトリウムの南湖院もあり、結核療養にふさわしい。源之助の結核療養の医療費は恒子が負担していたようである<sup>13</sup>。

源之助の葬儀について、黒田源太郎は次のように記述している。

葬儀は同月八日、故人が晩年好みて往来せし、東京市本郷区駒込蓬萊町専西寺に於て、友人葬として盛大に挙行せられ、会葬者には学者あり政治家あり、文士あり実業家あり、教育家あり、芸術家あり、全く社会のあらゆる階級の人々にて、其数は本堂に溢れ、且其中より上野岩太郎氏の吊詞、戸川残花翁の追憶談など有りしを以つても、君が半生の倂を知る

(『炉辺夜話』 p 404-405)

これを見ると、多くの参会者を得て葬儀が執り行われたことがうかがえる。同郷の黒田の身内鼯肩があるにしても、源之助の生涯は暗く不幸なものだっただけではないのはいかと思われらる。

また、娘梢は、源之助の葬儀のときの出来事を次のように語つたという。

父の葬儀のとき、まだ七歳でしたが、私は木村(貞子)先生と一緒に家を出ました。お寺での焼香のとき、この人(尾崎恒子)がまさきに私の手をひいて、焼香をあげに出てしまいました。こんなことを後で、私の母(やい)はずいぶんおこっていましたわ。

(『横山源之助伝』 p 396)

内妻やいと恋人恒子の関係性を想像させる証言である。木村貞子は梅香女塾の創設者で、源之助の死の二三日前に、梢を恒子の養女にするという遺言に立ち会つたという<sup>14</sup>。我が子の将来を思つてのことにせよ、娘を夫の恋人の養女にされたやい的心情は、如何ばかりかと思いやられる。しかし、やいは、たとえ親族の筆頭として梢をつれて焼香をあげた恒子に腹を立てたとしても、経済的に無力であり、内縁関係という法的立場もなく、娘に愚痴を言うしかないのだ。「美人で、ひとのいい女」(『横山源之助伝』 p 395)であるだけが取り柄のやいに対して、人物像を明らかにするにつれ、恒子は多彩で自立した魅力的な女性であったことが解つてきた。恒子と源之助が会つたいきさつは未詳であるが、晩年の源之助は自立した恒子に強くひかれ、ブラジル移民の推進活動や執筆活動の活力を得たのではないだろうか。

## 4 尾崎恒子

### (1) 「新しい女」尾崎恒子

尾崎恒子は、明治14（1881）年に東京本郷に生まれた。源之助より10歳年下である。

1911年10月の『日洋画報』には、恒子に関する次のような記事が掲載された。

◎本郷通りに尾崎といふ仏具屋がある。まだ独身だから若くは見えるが今年二十六七の娉婷たる娘さんがある。名はつね子。

◎此の齡にして夫を迎へず、嫁らずこれには何かの事情が伏在してゐなければならぬ。而も、必ずしも不別嬪ではない。（中略）

◎仏具商と云へば、寂しい商売である。電燈、瓦斯の煌めき渡る店頭では、薩張り調和しない。薄暗い釣洋燈の下に、大きな玉の真鍮眼鏡を掛けたお爺さんが、コツ／＼と何かを刻んでゐるやうでないと、それらしい感じは起らぬ。

◎つね子の家は、丁度それにお誂へ向きである。まことに静かで寂びてゐる。（中略）

◎斯くしてつね子は、何時の頃よりか、俳味、禅味、茶器を好むやうになつた。（中略）今、松榮斎理育と号して、生花のお師匠さんをしてゐる

（南蛮鐵「毛色の変つた女（六）本郷の狸娘尾崎つね子」<sup>15)</sup>

恒子は、東京の本郷にある「仏具商」の娘でこの時26歳か27歳とあるが、実際は30歳である。松榮斎理育と号して、古流華道の師範として生計を立てていることが記されている。

また、X生は『新らしき女』（1913.1 聚精堂）の中で、尾崎恒子を新しい女の一人に数え、次のように記している。

こゝに狸を愛する女がある。名は尾崎恒子。年は三十一。揚風庵といふ盆景のお師匠さんで、また松榮斎理育といふ生花のお師匠さんである。今日が日まで、まだ独身で、母と下女との三人、本郷森川町一の黒ずんだ家に住まつてゐる。（中略）

恒子が狸を愛するのは、今に始まつたのではない。まだ女子美術学校（恒子はその第一回卒業生である）に通ふ二十歳ごろから、もう狸を集めた。

これはモノズキばかりではない。——恒子は春木町の彫刻師章運の娘であるが、兄弟のうちで、一ばん親父に愛まれ、小さい時から、仕事場の木屑をいぢりながら、親父の傍に坐つて、よく狸の話をかきかされた。

（中略）十六歳の時、親父は臨終の枕辺に恒子と呼んで、やつぱり狸話をかきた。恒子は父の恋しさから、狸が好きになつたのだといふ。（中略）

自宅の稽古日は二七、その外には梅香女塾へ教へに行く。月に三どはカフェ、パウルスタへ活けに行く。西洋室と日本室とへーぱいづゝ、新しい珈琲の味と新しい花の香と、そこへはなるべく明るいハイカラなのを活けるのださうな。

（「尾崎恒子女史」<sup>16)</sup>

ここでは、恒子は彫刻師の娘と紹介される。女子美術学校の第一期生でもあるといい、経済的余裕のある家庭に生まれ育つたことが示される。16歳で父と死別し、その後の生活

は兄弟たちの援助を受けたのだろうか。少なくともX生の取材当時は、仕事をしながら母と下女の3人で生活していたようである。

さらに、1916年9月の『一大帝国』には、黒百合女史が恒子について次のように記している。

□尾崎恒子女史

独身で生花と盆石の師匠をして一家の生計をたて、居ると云ふだけなら至極月並だが、狸の研究をして女だてらに狸趣味を理解して可なり人にも鼓吹する、一寸奥底の分らない此人は一つの妙な謎である、(中略) 今恒子さんは父にも母にも死に別れた孤児を自分の子として引き取つて育て、居る、それは恒子さんに失恋の涙を長い年月の間雨とそゝがせた記念の子供である、ざらにある女には到底出来ない、男にもとても真似の出来ない偉らい女の好標本である、人情を解しない石の塊のやうな鐵の屑のやうな女ではない、火のやうな熱、煮え立つた湯のやうな血、真紅にもゆる唐紅の心の道を、狸趣味の衣で冷く包んだ恒子さんは、理の人情の人として殆んど典型に近い、自分を世の中に紹介するのが上手である、饒舌のみの一派の女の中に屹として聳ち立つて居る恒子さんは何と云ふ現代に珍らしい優れた女であらう

(「現代新進女傑月旦」<sup>17)</sup>)

大正2年から4年の間に母も亡くした恒子が「孤児を自分の子として引き取」ったという子どもは、源之助の娘梢のことであろうか。恒子に「失恋の涙を長い年月の間雨とそゝがせた」相手の子どもと記される。人情味あふれるその内面を隠し、理智的な「優れた女」であると、高く評価している。

これらの記述を見ていくと、恒子が当時「新しい女性」の一人としてかなり注目され、多くの人に知られた人物であったと推測される。

(2) 尾崎恒子の著作

尾崎恒子は揚風庵という盆景の師匠であり、古流華道の師範として松栄斎理育を名のって東京生花会会長を務めていた。生花の師匠として、大正6年11月から雑誌『婦人界』に生花の挿し方を掲載している。

尾崎恒子「誰にも出来る一輪ざしの挿し方」(1917.11) p 106-10

東京生花研究会長尾崎恒子「投入花の挿し方」(1917.12) p 60-61

東京生花研究会長尾崎恒子「お正月の生花」(1918.1) p 152-155

東京生花研究会長松栄斎理育尾崎恒子「四季折々の花を命に」(1918.4) p 136-138

東京生花研究会長尾崎恒子「六月の花の生け方」(1918.6) p 104-105

尾崎恒子「婚礼のお座敷の生花」(1918.12) p 104-105

これらの題名を見てもわかるように、みな生花の教本である。

また、『法治国』には、恋人の裏切りを描いた短編小説「拗ねた水仙」(1917.10 p 28-34) や、随筆「米騒擾の感想及批評 情けなくなつて参ります」(1918.9 p 19) も掲

載している。生花の教本はともかく、小説や随筆の執筆からは、多岐にわたる活動を通して、自立した「新しい女」としての恒子の注目度が高かったことをうかがわせる。

「新しい女」は、平塚らいてうが1911年9月に創刊した『青鞥』によって社会に強く印象付けられた。恒子が青鞥社に参加した形跡はないが、当時30歳の、自立して生きる恒子は、世間では「新しい女」の一人に数えられていた。その恒子が加わったのは、青鞥社より2年遅れて発足した新真婦人社だった。

### (3) 『新真婦人』と尾崎恒子

『新真婦人』は1913年5月に、西川文子を主幹にして創刊した。「女の手のみにて編輯し、<sup>けんえい</sup>経営し、<sup>ちやくせつ</sup>直接には<sup>すこ</sup>少しも<sup>だんし</sup>男子の<sup>じよりよく</sup>助力を<sup>あふ</sup>仰がぬ」(「宣言」『新真婦人』1913.5 p1)日本初の雑誌として、「<sup>あた</sup>新しい<sup>まこと</sup>真の<sup>ふじん</sup>婦人の<sup>せいくわつ</sup>生活」(同前)を目指して努力し、世の中の女性たちに推奨することを目的とした。この創刊メンバーの一人に尾崎恒子がいる。

恒子は創刊号に随筆として「狸趣味」を書いている。自身が趣味とする「狸」に掛けながら、「<sup>をんな</sup>女が<sup>だんし</sup>男子にカラカハレ<sup>おもちゃ</sup>玩弄にされるのを<sup>しん</sup>真に<sup>いと</sup>厭ふやうにならねば<sup>だめ</sup>駄目」<sup>18</sup>と、女性の心の変革の必要を記している。また、創刊号に掲載された5月4日に開催される「第二回婦人雄弁会」の広告には、「弁士及演題」として尾崎恒子の「婦人の趣味生活」の文字が見られる。これらから、恒子は創刊メンバーの中でも中心的存在であったことが推測される。

第4号(1913.8)には、「東西南北」<sup>19</sup>に尾崎恒子から西川文子に宛てた6月16日付の書状が掲載されている。第6号(1913.10)にも「東西南北」<sup>20</sup>に病氣療養中の恒子からの書状が掲載されている。

第8号には「新刊紹介」に源之助著の『南米ブラジル案内』(1913.12)が次のように紹介されている。

横山氏は親してブラジルを見て来られた人である上に尚ほ一ち一ち専門家に糺して此の書を作られたのであるから、記事の正確なるは云ふまでもない且つ横山氏は文名ある人である丈けは此の書は頗ぶる有興味に出来て居る。尚ほ其観察の非凡なることも本書の一特色と云はねばならぬ(写真六十二入定価八十五銭、本郷区東片町百九一南半球社) (『新真婦人』第8号 1913.12 p53)

源之助の著書の紹介文を恒子を書いたかどうかは不明であるが、『南米ブラジル案内』の紹介記事掲載は、恒子との関連によるものであろう。「一ち一ち専門家に糺し」たという執筆の内情も、恒子であるなら十分知り得る情報である。

「第二回蛙聲会の記」(『新真婦人』1914.2 p56)では、12月19日に開いた茶話会「蛙聲会」に参加した恒子について、「江戸趣味が五体の何処にも溢れて居る」とある。古流華道の師範であり、日本文化に造詣の深い恒子に一目置く同人たちの心情がうかがえる。

第11号(1914.3)に、2月3日から11日までの9日間の「路傍活動の記」<sup>21</sup>が掲載されている。恒子は4日、6日、10日、11日の4日間参加したと記されている。注目するのは、



10日の「午後尾竹さんに尾崎さん西川さんのお子様方も御見えになった」<sup>22</sup>という記述だ。恒子の子どもが参加したというのである。1914年2月の時点で、すでに恒子のもとで源之助の娘梢が同居していたことをうかがわせる。また、「第三回蛙聲会の記」には、「大正三年第一回の蛙聲会を森川町五十二番地尾崎恒子様のお宅で開きました」<sup>23</sup>とあり、恒子の狸趣味満載の歓待の中で「東北地方救済の方法」<sup>24</sup>について打ち合わせが行われた。ここでは恒子宅を「有髮尼庵」と称してもいる。第12号（1914.4）の「第四回蛙聲会の記」にも、「狸庵有髮尼の君とよぶ尾崎さん」<sup>24</sup>が「銀杏返しに上げていらしたのはめづらしくも又江戸の匂ひ」（同前）がしたと記され、「有髮尼」が恒子の別名として通っていたことを示している。

第15号（1914.7）の「蛙聲会の感想」<sup>25</sup>に、6月12日夜に恒子が書いた文章を掲載している。ここでは署名として「夕の字」を用いている。第16号（1914.8）には、その「夕の字」の署名で「恋の会の記」<sup>26</sup>として、七夕に寄せた連歌を記している。第17号（1914.9）では、「編輯余録」<sup>27</sup>に恒子が暑さのために病気になったとの記述までである。恒子の体調も記事になるほどに、社員の中で注目された人物であることを示しているといえよう。

第23号（1915.3）から第26（1915.6）には「生花について」<sup>28</sup>を連載、第24号（1915.4）「編輯余録」<sup>29</sup>に恒子から蛙聲会場に届いた「近頃貧乏暇なし」という葉書を紹介している。

そして1915年7月刊行の第27号（1915.7）に、有髮尼「婚約」を掲載した。6月17日夜1時15分に執筆したというこの短編は、源之助をモデルにした「蝶様」の臨終の場面が描かれている。

その後、恒子の文章が『新真婦人』に登場するのは、約6年後の1921年4月に刊行した第95号の「草花の月」<sup>30</sup>であり、それ以降の執筆はない。

## 5 恒子と源之助

### (1) 有髮尼「婚約」

臨終に立ち会った尾崎恒子は、源之助の最期の様子を「有髮尼」の署名で短い創作「婚約」として著している。これは、6月3日に源之助が亡くなってから、わずか二週間後にしたためたことになる。恒子は源之助の臨終の悲しみを、執筆することで心に刻んだのであろうか。「婚約」には源之助を看取った恒子の生々しい感情が描かれていると考えられ、恒子の源之助に対する強い愛情を垣間見ることができる。

内容は、「蝶の塚」（『女学世界』1915.10 p182-187）と同じモチーフであるが、「蝶の塚」にあるような生前の蝶様の思い出はなく、次のように、死の床で蝶様と恋人との別れの場面だけ描いている。

「婚約」 有髮尼  
六月一日の夜であつた — 君の枕辺近く初めて坐つた夜であつた。こんな病氣にな

るのであつたら早くいつしよになつてしまへば良かったと、にぢみ出る涙をハンケチに押へてゐると、

まだ起きてみてくれたの……もう何時？

お目がさめまして、今一時打ちましたの、氷でもお口に入れませうか、あの又湿布を取かへませうネ、

と私は水にさらされた古い木の根かなぞの様に瘠せ細つた手を握つて、

どうしてこんなにお瘠せになつたでせう、しつかりして早く良くなつて下さいまし少しでも良くおなりになつたら今度こそはどんな事があつても早くいつしよになつてしまひませう、私はもうこんなお姿を見ましては、とても離れちや居られませぬネ早く治つて……

と一層かたく手を握ると君は淋しい面にも幽かなほほ笑み、

あ、……だけど僕は死ぬのじやアないかしら——大變世話になつてしまつたネ洲さん僕は君に濟まない……かんにんして……

と握りかへしたまう五指には最早その力がない、

僕は疲労してネ疲労してゐるのだよ、

と私の顔をぢつと見つめた君の眼には恐ろしいほど凄惨感謝の熱涙真実の光りがあふれてゐました。私はもう病が伝染しやうとどうせうとまゝよ、共に死ぬなら却つて本望

ネ貴郎と呼びます、洲子と呼捨て、下さいまし

私は初めて——互に想ひ交して六年後の今はじめて死の前の男の手を自分の口にもつて行き、

許して下さいネエ貴郎！早くいつしよになつてゐたなら同じく御病氣なさるとしても……こんな淋しい情ない愁らい思はおさせ申さなかつたのですが……いつも申上げます悲しい私の身の上、父と祖父との病をおもひますと私はいくら思ひ焦れても恋しい貴郎の血統をけがしともない——次代の我子に又私と同じ悲哀を残しともない、そのみか世間の誤解の厭はしさに貴郎の想も叶はせず此身も又今日までは戀い心を自ら殺してゐたのでござんすネ許して下さい蝶様！假令貴郎は今宵お果てなされても洲子の心は未来永劫貴郎の妻でございます

と私は男の胸に面をあて、思ふ存分泣きました。六年の間の長い年月忘れんとして忘られぬ我が恋に悲しき夜々をひとりねの枕に念ずる普門品、たゞ／＼祈願は君が身のうへさち上幸あれかしと、ひとり泣く夜は数知れなくも嘗て男に涙を見せた事のない洲子が初めて男の胸に流した血の涙……

あ、僕は——僕は十二分の満足ですぞ洲さん、君はどうぞ幸福に暮して下さい——僕はもう死ぬ——死ぬなら早く死にたいよ、斯うして君が側にゐてくれる中に僕は死んでゆきたい、

と君が力なき両手と、骨もくだけていつしよになれと固く結んだ私の手とは君が苦し

い胸の上に重ねたまんま四つの眼から流るゝ涙は……

ネどんな事があつても洲子を信じてみて下さいまし、他人に言へない事でもなんで  
も私には仰有つて下さるのですよエ、貴郎様ごぞんすか分りましたか、  
と握つたまゝの双手を揺ると君は涙の目を見開いて

洲さんには誠にすまない——すまないけれども僕は君を信頼して逝く！夢子の事を  
ネエ洲さん、どうか君が生んだ子だと思つて育てゝもらひ度い……

分りました……もうそれ丈ですか、夢ちやんの事は私がたしかに引受ました——蝶  
様よ洲子は生きた女です安心してゐらつしやい、きつと、きつと私は命に代へても  
夢ちやんの身は護ります、  
と言葉と同時に自分の心に誓つた私の決心！

有難う——忝けない洲さん、済まないけれど頼みますぞ、君も身体を気をつけ  
て——しつかりしてね狂と云ふ字は今日かぎり忘れてしまひなさい……

と、それから後は半夢半醒、  
翌二日は心身ともに安静に夕暮なぞには尋ねてくれた私の友人にも世間ばなしの一  
ト言二言云つてゐましたが十二時頃より俄に変わり——医師の急診——カンフル注射  
の一回二回三回も遂に甲斐なく三日の暁五時三十分には  
洲さん僕は逝くよ——ポツリ／＼と歩いてゆくのだ  
とそれなり君はひとり安らかに、とこしなへに帰らぬ国へと旅立たれてしまつたので  
ございます。其の後の事はもう洲子はおはなし致す勇氣はございませぬ。

あ、人生四十五年志を広く海外発展にもち自ら進んで南米に遊び自ら書を著し渡  
航者の便を図りし君が業半にして病魔に誘はれ呻吟五ヶ月而かも私如き一少婦の僅々  
二日二夜の介抱に淡き満足を得て逝きしをおもへば——薄倅の人よ数奇の君よ、我が  
愛人よ恋しき人よ君がみ霊や今いづこ願はくば安んじたまへ君が遺愛児夢子の身は今  
何をか夢むらんほ、笑む寝顔安らかに洲が机の傍にあり——愁らきは人世、悲哀は私  
と離れぬ運命でせうか、否否私泣いてはゐられませぬ故人の愛に報いる私の任務  
は夢子の教養——私の。  
趣味の修養はこれからだと存じます。(大正四年六月十七日夜一時十五分)

『新真婦人』1915.7 p48-50

「病が伝染しやうとどうせうとまゝよ、共に死ぬなら却つて本望」という洲子の言葉は、結核に肺炎を併発して亡くなった源之助に付き添う恒子の心情を彷彿させる。夢子を託される洲子と、源之助の娘梢を養女とした恒子の姿も重なる。臨終の源之助の姿をそのまま写した短編に見えるが、実際には臨終には中村武羅夫も同席し、前述したように、梢は既に恒子と同居していた様子もうかがえるので、必ずしも短編に記された情景が事実ではない。それでも、臨終の前の愛に満ちた語らいは臨場感に溢れており、源之助が愛に包まれて最期を迎えたことを想像させ、暗さが付きまとう源之助の生涯を明るく照らす。

## (2) 恒子と源之助

「つね子」の署名で書かれた「蝶の塚」は、松原岩五郎が編集する『女学世界』の源之助が亡くなった4か月後の10月号に掲載された。松原が友人源之助の死を悼み、恋人であった恒子に故人を偲んだ文章を依頼したのであろうか。その内容は、「婚約」の前後に蝶様との日常や後日談が付け加えられ、主人公の女性の名が「たぬ」に変更されている。臨終の様子も整理され、蝶様と「たぬ」の語らいも齟齬がなくわかりやすい。蝶様の渡米の不安や二人の恋愛の苦悩、蝶様の死後の「たぬ」らしい供養が描かれ、小説としても面白い。4カ月という時間で源之助の死を整理し、梢の養育をしながら強く生きる恒子の姿が想像される。

一方で「婚約」は恋人の死に直面した悲痛と後悔、恋人への愛情に満ちている。自らの「血統」の不安から共に暮らすことを拒んだことを後悔し、これからずっと傍らに居るとすがる。治ったら結婚するという洲子の悲痛の想いのこもった「婚約」がなされる。そして「私は泣いてはゐられませぬ故人の愛に報いる私の任務は夢子の教養」と、自身を鼓舞する。夢子を養育することで、自らも生きることを決意しているのだ。「婚約」には、源之助の死を目の当たりにした恒子の抑えきれない感情がそのまま吐露されているのではないだろうか。源之助の死を小説に描くことで受け入れ、悲しみを抱えながら遺児を育てて強く生きようとしたのではないだろうか。源之助と恒子の強い心の結び付きが感じられる短編と言えよう。

尾崎恒子との関わりを見ることで、横山源之助の人物像の一端をうかがい知ることができ、横山源之助の人物像も、源之助が愛し源之助を愛した尾崎恒子の人物像も、情報が少なく、まだまだ不鮮明なことだらけである。今後も調査・研究をつづけながら補完していけたらと思う。

### 〈注〉

- 1 『大原社会問題研究所雑誌』 No.579 2007.2 法政大学大原社会問題研究所
- 2 『大原社会問題研究所雑誌』 No.579 2007.2 法政大学大原社会問題研究所 p.8-9
- 3 『群峰』第1号 2015.3 富山文学の会 p.2-10
- 4 1910.10 越中下新川郡魚津町役場
- 5 1982.3 魚津市役所
- 6 立花雄一は「別記 ― 半如夢」に、「源之助の実家某は郷里富山県魚津町の資産家であり、網元であった。同時にその家の下女を実の母とする赤ん坊は棄児同然であり、そのことは秘密とされてきた。」(p.8)と記している。
- 7 立花雄一『横山源之助伝 ― 下層社会からの叫び声』2015.10 日本経済評論社 p.10  
以後、『横山源之助伝』と略す。
- 8 立花雄一『横山源之助伝』によれば、明治7(1874)年2月2日生まれで、魚津町金屋町百八番地出身。明治32年11月上京、明治37年に「横山源之助の紹介で博文館の『市町村雑誌』

に「婦人と放火」、板垣退助の『友愛』誌上に「婦人と殺人」を執筆」(p2)とある。

この年、市ヶ谷監獄看守長、大正12年に富山刑務所長、昭和11(1936)年1月に没したという。

- 9 『横山源之助伝』 p 34
- 10 「昭和社会事業史への証言」1982.10 ドメス出版
- 11 『明治学院大学社会学・社会福祉学研究』2010.3 p 239-244
- 12 『明治大正の文学者』1949.6 留女書店 p 260-265
- 13 『横山源之助伝』 p 397 には、「横山の医療費も尾崎恒子が面倒をみていたらしい。」とある。
- 14 『横山源之助伝』 p 397 には、「臨終の二、三日前、横山源之助は、梅香女塾の木村貞子に立ち合ってもらい、尾崎恒子に梢を託すことを遺言したという。」とある。
- 15 『日洋画報』1911.10 p 15
- 16 『新らしき女』 p 144-147
- 17 『一大帝国』1916.9 p 72-73
- 18 『新真婦人』1913.5 p 37-39
- 19 『新真婦人』1913.8 p 47-48
- 20 『新真婦人』1913.10 p 58-59
- 21 『新真婦人』1914.3 p 6-17
- 22 『新真婦人』1914.3 p 15
- 23 『新真婦人』1914.3 p 59-60
- 24 『新真婦人』1914.4 p 63
- 25 『新真婦人』1914.7 p 64-65
- 26 『新真婦人』1914.8 p 60-64
- 27 『新真婦人』1914.9 p 51
- 28 『新真婦人』1915.3 p 50-51、『新真婦人』1915.4 p 58-60、『新真婦人』1915.5 p 62-63、  
『新真婦人』1915.6 p 47-48
- 29 『新真婦人』1915.4 p 70
- 30 『新真婦人』1921.4 p 30-31